
俺と幼馴染の波乱万丈な日（改）【前編】

青海空

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

俺と幼馴染の波乱万丈な日（改） 【前編】

【Nコード】

N4041P

【作者名】

青海空

【あらすじ】

俺には幼馴染がいる。

俺は、幼馴染以上の関係にはなってはいけないと思い込んでいた…

(前書き)

どうも。青海空です。

前は、とんでもない駄作を投稿してしまっただけで申し訳ございません

m (|) m

今回はそれを改変したものです。

そして、意外と長くなりそうだったので、二つに勝手ながら分けさせていただきました (^ | ^ ;)

最後まで読んでいただけると嬉しいです (T | T)

本文

「コウくん。朝ですよー。雲一つない青空が眩しいくらいに輝いてますよー。実際は太陽が眩しいんだけどねー。アハハハ」

「……何をしているんだ楓」

寝起き一番に発した言葉は、「おはよう」という挨拶なんかではなく、ツツコミだった。

ああ。慣れとは恐ろしいものだな。

鍵を閉めておいたはずの部屋に不法侵入している女の子がいるというのに、驚かなくなるとは。

「あ、やっと起きたよー。ホラ！」

^{かえで}楓は手を俺に差し伸ばす。満面の笑顔で。

楓ー早川楓。^{はやかわ}

幼稚園からの付き合いで、まあ俗に言う幼馴染ってやつだ。

俺は楓の手を取らずに再び楓に背を向けて寝入る。

「あー、こら！ もう、コウくん起きてよー」

楓は俺の肩を揺さぶるが、俺は狸寝入りに努めた。

「はあ。もうしょうがないなー」

と、背中に感じる楓との距離が近くなった。
何をするつもりだ？

「！」

突如、肩に何かが触れた。

柔らかい、が確かにある二つの感触……

「起きないと、コウくんの唇奪っちゃうぞ」

「なっ……！」

耳元で囁かれた甘い言葉にぞくつと来た俺は慌てて布団を捲り上げて起き上がる。

「あはっ。ざーんねん」

「残念じゃねえよ！　いつも性質たちの悪い冗談はやめろって言うてんだろ！」

「コウくん、顔赤いよ？」

「う、うるせー！」

「それに大丈夫！　冗談じゃないから」

「尚、悪いわ！」

まったくこいつってヤツは……

こげ茶色のロングヘアーをツインテールに纏め、整った顔立ちをしているというのに……性格がコレだもんな。

もう少し、恥じらいという感情を持って欲しい。

いや、さっきのは不覚にもドキッとしてしまったが。

「ホーラ！　早く着替えて学校行こ？」

机の上に置いてある時計を見ると、七時半を少し回った辺り。最終登校時間は八時十分であり、それ以降に学校に行くと遅刻扱いとなってしまう。

ここから俺らの通う高校までは、約三十分。

確かにそろそろ起きないとマズイか。

俺は楓に言われたから、ではなく単純に遅刻しないためにベッドから下りた。

……楓に言われたからじゃないからな。

「やーっと起きてくれたよー。って、ちょ、ちょっとタンマ！」

「何？」

俺がパジャマの上を脱ぎかけた所で、楓から「待った」がかかる。

「着替えるなら私が出て行ってからにしてよ、バカ！」

楓はそれだけ言い残すと、部屋を出ていった。

その顔が赤くなっていたように見えたのは、気のせいだよな？

うん。気のせい気のせい……

俺は余計なことは考えずに、さっさと着替えてしまうことにした。

部屋を出ると、玄関に俯いた楓が立ち尽くしていた。

俺は玄関に用があるため、自然と楓の元に近寄る形になる。

「コ、コウくん」

「ん？」

ローファアを履いていると、横から声がかかった。

「今度から着替える時は言ってね。流石にコウくんといえど、着がえてる所はちよっと……」

楓は何故かそわそわしながら注意を促した。

何でそわそわしてんだ楓のヤツ……お前がそんなんじゃ、調子狂うじゃないか。

「あ、ああ」

俺は楓の要求を承諾する。

「それじゃ気を取り直して……行こっか！」

楓は自分にも俺にも言い聞かせるように言った後、ドアを開いた。差し込んでくる光が、今日も暑そうだなということを予感させた。

八月十日。

世間一般でいう夏休みだ。そんな夏休みであるのにも関わらず、俺らが学校に行く理由など一つしかない。

……地獄の赤点補修だ。

ちなみに楓はこんな性格の癖に頭脳明晰であり、赤点なんでもってのほかである。

それなのに、どういうわけかこいつは俺の補修に付き合っているのだ。

何だか少し申し訳ない。

「おーふたりさーん！」

楓と並んで歩道を歩いていると、背後から声がかかった。

「あ、真奈実まなみー！ それに伸二しんじくんも！ おはよー」

「よーす」

俺と楓は対照的なトーンで二人に声をかける。

「相変わらず仲が良いわねー」

そんな俺らを真奈実はニヤニヤしながら見ている。

「まあねー」「いやいや」

楓と俺は、お互いの正反対の回答に顔を見合わせる。

「え？　だって仲はいいよ？」

「あんな、楓。こういう時は『そんなことないよー』って返すものだろ」

「うーん。よくわかんないや」

「……まあいいか」

楓の性格だから仕方ない、と俺は小さく苦笑する。

ま、その純粹さが楓のいいところなんだけどな。

「流石楓ね。期待を裏切らない子だわ」

真奈実は楓を背中からぎゅーと抱きしめた。

「ちょ、ちよつと真奈実ー」

「いいじゃないじゃん。ふわー。楓の匂いがするー」

「あ、ちよつと、そ、そこはっ……あ、やん！」

「うわっ。凄く柔らかーい」

「だ、駄目まな……んっ」

お二人さんは女の世界というものに入ってしまったようだ。

「朝から暑苦しいよな、真奈実のやつ」

伸二が妹である真奈実の行動を見て、呆れたようにつぶやく。

いや、これを見ての感想がそれですか伸二さん。

「何か言ったか馬鹿兄さん」

「何もいってねえよ」

今更だが、伸二と真奈実は同じ年の異母兄妹である。

詳しいことはわからないが、一年前辺りから同じ家で過ごすことになったらしい。

「嘘。絶対何か私の悪口言ってた」

「だから言ってるねえと何回言ったら気が……」

「ま、まあまあまあ」

既に日常茶飯事となりつつある兄妹喧嘩に楓が割って入る。

二人の喧嘩は楓の仲裁により、楓に甘い伸二が先に折れて真奈実に謝するという形式で、いつも通り幕を閉じた。

「やっとおワター！」

伸二が空に向かって伸びをする。

「ホント長かったー！」

「もう赤点とかいう制度なんか消えちゃえばいいのに」

「全くもって同感」

一週間にも渡る長い補修がやっと終了し、ようやく俺らは羽根を伸ばすことに成功した。

帰り道も不思議と足取りは軽い。みんなもそうなのか、今日は伸二のいつもなら白けるジョークでさえも笑ってしまった。

そうして歩いている内に伸二や真奈実と別れる交差点に辿り着いた。

「あ、そういえば！」

真奈実が別れる直前、何かを思い出した。

「今日、仙龍川で花火大会があるらしいんだけど、みんなで見に行こうよ」

「花火ー!？」

楓が一際大きい声で真奈実に聞き返す。その目は、小さい子供が欲しいものを買ってもらった時のものに似ていた。

そういえば楓は花火が昔から好きだったもんな。

仙龍川とは、ここの交差点から徒歩五分くらいで到着する所にある、小さな川だ。

「そうよ。今日の夜の七時半からなんだけど、どうかな？」

「コウくん行こうよ！」

楓が俺の手をブンブン振り回す。

まあ特にやらなきゃいけないことがあるわけでもないし……

「いいんじゃないか？」

「オツケー。ならここの交差点に七時集合ってことで！」

真奈実の提案に頷き、俺たちは一度解散した。

空を見上げれば、先程までの青空が嘘だったかのように、黒に覆われていた。

その黒に白や赤や青の星が満遍なく散らばっている。今日の月は綺麗な上弦だった。

「コウ」

「おう。伸二か。二人は？」

「先に待ち合わせ場所言ってるって追い出された」

伸二は肩をすくめて見せた。

六時くらいに真奈実が楓を呼び出していたため、今楓は真奈実及び伸二の家にいる。

しかし何やってんだろ？ もうすぐ七時になるっていうのに……時計の長針が十二を指した所で、俺らは二人を呼びに行こうと家に行こうとした。

「お待たせー！」

「やっと来たか」

俺は軽く毒づき、後ろを振り返る。

「……」「わーお」

俺は二人を見て某然とした。伸二はワザとらしく感嘆を上げた。

「どうよ？」

真奈実が誇らしげに胸を張る。

「ええーと、その子誰？」

「もう！ 何言ってるのよコウ。楓に決まってるんじゃない」

そうだな。そうに決まってるよな。

だが……

浴衣姿の楓は、まるで別人のようだった。

ツインテールだった長髪は後頭部で団子のように纏められ、少し化粧もしているのか何だか雰囲気ガラッと変わっていた。

金魚の絵柄の浴衣に身を纏った楓は……

「どうかな？ 私の浴衣姿……」

それはもう悔しいくらいに似合っていた。

「コウ。何か言ってあげなさいよ」

俺は真奈実に促されてようやく俺が黙りこくっていたことに気付く。

「あ、ええーと、いいんじゃないか？ 似合っていると……思うぞ」

「ホントに？」

言った瞬間、俺は恥ずかしくなって楓から目を逸らした。楓の嬉しそうな顔が瞳に焼き付いていた。

やべえ、楓のやつ……すごくかわいい……

俺は一目惚れした人の気持ちを味わった気がしたが、すぐにその邪な気持ちを追い払う。

駄目だぞコウ……俺と楓はあくまで幼馴染なんだから。

「うん。早川さん似合ってるよ」

「ありがとう伸二くん」

伸二はいたってクールに楓の浴衣姿を褒める。

「ちょっと、私は？」

誰からも何も言われなかった真奈実が不満を垂らした。

「ん？ ああ、似合ってる似合ってる」

「何よ、その適当な感じはー！？」

真奈実は伸二に飛び掛かる、が。

「おわっと。ははは。浴衣だから早く走れまい」

浴衣が足に引っ掛かって真奈実は逃げた伸二を追うことができない。伸二はそれを良いことに真奈実の悪口を安全な場所から浴びせている。

「くそ、この馬鹿兄さん……後で覚えておきなさい」

真奈実の背後からは怒りのオーラが見えそうだった。

こりゃ、帰ったら伸二死亡だな。

俺は楓の方を見ると、目があった。そして、そんな二人を見て同時に笑った。

七時半になっても、花火は打ち上げられることがなかった。

先程放送で、三十分遅れての打ち上げとなるらしい。理由はよく聞こえなかったが。

「……………」

俺と楓の二人は、並んで花火が打ち上げられるのをじっと待っていた。

真奈実が気を利かせてくれたのはいいが（ちなみに伸二は先程鳩尾に真奈実の蹴りが入り、トイレに籠っている。それをさすがにやりすぎたと思ったのか、真奈実がトイレの前で伸二が復活するのを待っている）、何だか気まずい。

いや、そう思ってるのは俺だけか。……あれ？ 俺って楓といつもどんな話してたっけ？

「……コウくん」

「え？」

俺が悶々としていると、楓が俺の手を握ってきた。

あれ？ どうしてだろう？

何故か凄く懐かしい気がする。

俺は今の状況に既視感デジャヴを覚えた。

だが何故だかはわからない。まだ、全てを思い出すにはピースが足りていない。

そんな確信が俺にはあった。

「約束、覚えてる？」

約束……？

後編に続く……

（後書き）

最後まで読んでくださった方、本当にありがとうございます！
実は昨日改変したものを書き終えたと思ってたらパソコンがプツンと突然切れたためデータが吹っ飛んでしまいました（笑）
だから、どうせならともう一度書き直し、少し長くしようと思って書いたのがこれです。

後編は、12／13までには投稿しようと思います。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n4041p/>

俺と幼馴染の波乱万丈な日（改）【前編】

2010年12月10日07時28分発行